

チャーハンの味

仙台市立南中山中学校 3年 佐々木 心 花

「お母さん。このご飯おいしい！」

何回も言っていたこの言葉。いつからか、この言葉を言わなくなっていました。

私は、とにかく食べるのが大好きで、特に母が作ったご飯が一番好きでした。オムライス、親子丼など、どれを食べてもおいしかったのに、ある日のチャーハンをきっかけに、母の作るご飯の味が違ってきました。

ご飯はこげてパリパリ、味はしょっぱすぎる。こんなにまずいチャーハンは食べたことない、そう感じるほどまずかったのです。

この頃母は、病気にかかっていた。しかたないと思いながら頑張って食べていましたが、こういうご飯が何度も続き、私はついに、

「このご飯、まずい。いつもいつも、お母さんの作るご飯、おいしくない。味は、しょっぱいし、こげてるし。一生、作らないで！」と、言ってしまったのです。今思うと、言いすぎたと思いますが、その頃の私は、がまんの限界でした。そこから母は、一切ご飯を作らなりました。そして、どんどん病気も悪化していき、私が小学5年生の時、母は帰らぬ人となってしまいました。涙がとまらず、毎晩のように泣いていました。

涙も枯れ、気持ちも落ち着いた頃、自分の部屋を片付けていたら、一つのノートが見つかりました。それは母の日記でした。パラパラとめくっていると、ある日の日記が目に入りました。

「心花にもっと、ご飯を作ってやりたかった。あの笑顔を見たかった。病気にさえならなければ…」

震えた字で小さく書いてあった言葉を見ると、あの時の母の悲しそうな顔が浮かび、ポツポツと、枯れ果てたはずの涙が溢れ出てきました。

思い出せば、母が元気だった頃、仕事から帰って来ては、

「ご飯、何がいい？」

と笑顔で言い、どんなに疲れていても、どんなに具合が悪くても、一生懸命作ってくれました。そんな母に、あんな言葉を言ってしまった私。頭の中にはもう「後悔」の二文字しかありませんでした。もっと味わって食べれば良かった。もっと、愛情のこもったあのご飯を食べたかった。もっと、もっと。悔やんでも、悔やんでも、悔やみ切れないこの気持ちを、涙という雨で洗い流したくて、たくさん泣いてしまいました。でも、流せるはずもなく、今でも、チャーハンを食べる度、あの時のことを思い出し、後悔しています。

母の味、それを食べられなくなってしまった今、もうあの後悔はしたくないという気持ちで、毎日の食事を大切に食べることにしました。母の味は、当たり前ではないのです。今、祖母や、おばが毎日、私のご飯を作ってくれています。どの味も本当においしいですが、やはり、今でも、一番の好物は母が作ったおいしいご飯です。あのまずかったチャーハンもふくめ、愛情のこもった一つ一つのご飯は、一生忘れられません。

私も将来、母の味を作ることになるかもしれません。正直、料理は苦手です。なので、上手に作れるか、本当に心配です。でも、私も愛情のこもったご飯を頑張って、母に負けなくらい、たくさん作ってあげたいです。そう、あの時の母のような笑顔で。